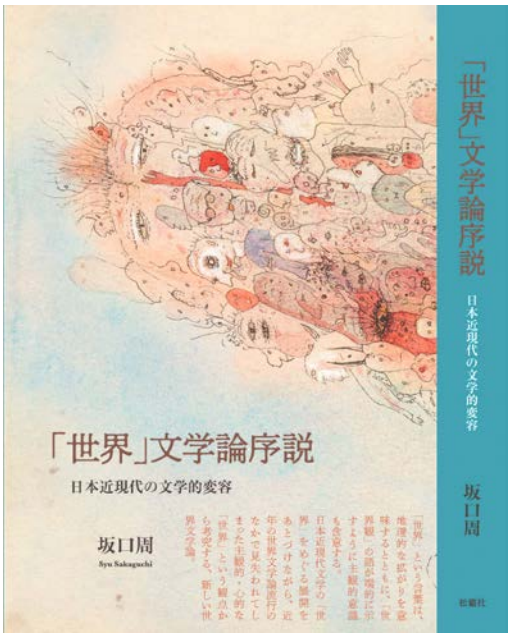
「世界」文学論序説――日本近現代の文学的変容

本書は、世界文学論的な観点を応用した「日本近代文学」論である。人間が自らの存在を根拠づけている〈私〉の「世界」を、客観的な「世界」として描き出すために近代小説が誕生したと見なし、その「世界」形式の歴史に着目した。語り手にとっての主観的な「世界」のイメージは、グローバルな世界意識、ひいては「世界文学」に対する関心と連動している。一九世紀末以降の「世界」像の変化を追いながら、日本近現代の小説が辿った構造的な変化の理由を明らかにするのが、本書の基本的な目的である。

第一～三章は、近代小説が「世界」を意識していく過程を押え、「世界」の概念体系に本格的に参入していき、やがて分裂／複数化していく様子を理論的に概説する。第四章では、語りの構造を支える「感情移入」に特に注目し、議論の全体に有機的な連関を与える。転じて第六章と終章は、議論を現代に拡大し、「世界」が消滅していく過程で小説が抱えた新たな困難と工夫を追究している。

なお、前著『意志薄弱の文学史――日本現代文学の起源』(慶應義塾大学出版会、2016）では、心理学的・経験論的な言説のネットワークの次元から「日本近代文学」の展開を洗い直し、他方、本書では哲学的・観念論的な「世界」意識の推移の次元から、同じく「日本近代文学」の展開を整理している。つまり両書を補完的な関係に置いて、あわせて「日本近代文学」像の歴史的ダイナミズムを立体的に浮かび上がらせることを試みた。



「世界」文学論序説　日本近現代の文学的変容
著者：坂口周
発行所：松籟社　発行日：2025 年 1 月 31 日
定価［本体 3800 円＋税］(四六判・560 頁）
ISBN: 978-4-87984-460-6

目次

はじめに
第一章「世界」文学試論――貧乏的世界文学の系譜と村上春樹
一　世界文学論の流入と整形
二　二〇世紀文学「世界」の変容――〈ゆらぎ〉から〈ポップ〉へ
三　日本近代における「世界」文学の形成
四　環世界と貧乏性
五　動物的世界への感情移入――志賀直哉と大正作家たち
六　「世界の像」を描く作家――村上春樹文学の「世界」構造
七　理論としての「世界」文学
第二章　「世界」表象の歴史と近代小説の形成
一　問題設定としての「世界」
二　「世界」の濫用｜ 一九八〇年代
三　顕現する「世界」の捻れ――戦後文学とアイロニー
四　「世界像」の時代と小説の機構
五　俯瞰する眼｜ 自由意志と自然（環境)、そして想像力
六　反「世界」期の一九世紀末と日本近代文学
第三章　近代文学の現象学的転回
一　世界文学 VS 比較文学
二　日本的「自然主義」を導くコード
三　現象学的転回と写生
四　「世界」を分かつ翻訳――森鷗外「舞姫」再読
五　「新しい女」と「宿命の女」
六　「世界」を縁取る〈女〉の表象
七　同情を拒む「演技者」たち
第四章　感情移入の機制――他なる「世界」に生きる〈演技〉
一　「私」を演じる「私」―― 私小説演技説
二　不確定な世界像
三　感情移入美学とは何か――「同情」の美と倫理
四　「非人情」という感情移入
五　empathetic な美学の胎動
六　国木田独歩「忘れえぬ人々」再考
七　他者を「哀しむ」こと――解離の美学
八　「没理想論争」の止揚
九　試される「共感」の力――現代文学と新「人間主義」
第五章　小説家としての正岡子規――先駆する「写生」
一　子規の小説史
二　子規の現象学的転回
三　歩行と現前――動的に「写生」する
四　ヴァーチャリティの描写
第六章　現代文学と〈想像力〉の問題――村上春樹の場合
一　象の話
二　「純粋」への希求と不可能性
三　想像力の消滅
四　世界の消滅
五　想像力論の戦後史的背景
六　大江健三郎と八〇年代的想像力
七　村上春樹以後の想像力の更新
八　二一世紀の「世界文学」時代へ――想像力の想像的回復の夢
終　章　「世界」の消滅のあとさき――〈経験的― 計算論的二重体〉の時代に
一　おさらい――〈経験的-存在論的二重体〉に至るまで
二　思想としての映画メディアの全盛
三　持続可能でマジカルな現実の世界
四　ビデオゲーム的主体性
五　〈経験的-計算論的二重体〉と現代小説
六　終わらない「世界」文学
あとがき

内容

第一章は、「「世界」文学試論――貧乏的世界文学の系譜と村上春樹」と題して、「世界」文学論という方法に則った議論の一例を示しながら、本書のコンセプトを具体的にイメージすることを目的としている。19世紀末頃から、日本語文学は西洋中心の「世界文学」概念の流入に対抗して、日本文化の固有性を主張する「世界」意識を膨らませていった。本章は、日本近代文学と世界文学との関係を表す一形式として、「写生文」に始まって大正期に全盛となった「貧乏的世界」像を描く小説の系譜を抽出したうえで、そのような創作的態度が日本語文学の本流を作り、やがて世界的作家として成功した村上春樹ら現代文学にまで継承されていった可能性を考察する。

第二章は、「「世界」表象の歴史と近代小説の形成」と題して、19世紀に自由主義経済が軌道に乗るのに伴って、近代小説が「世界」を意識していく過程を大局的に考察する。そのうえで、近代の「日本文学」が「世界」の概念体系に本格的に参入していく様子を理論的に概説する。この章の中心を占める具体的な出来事は、坪内逍遙と森鴎外の間で交わされた「没理想論争」である。これを〈経験的‐超越論的二重体〉（小説による主体性の構造）の確立への分水嶺として象徴的に扱い、以下の議論の舞台を整える。

第三章は、「近代文学の現象学的転回」と題して、比較文学と世界文学論の方法論的な違いと調停を検討しながら、第二章の内容とその続きに具体的な肉付けをする。議論の焦点は主に「女」の表象に置いている。先に『明暗』冒頭で確認したように、大正期を経るなかで「日本近代」の小説は主体性の構造そのものを意識する段階に入っていくが、それを促した要因の一つは、帝国日本において被植民地的「世界」観と宗主国的「世界」観との葛藤がピークを迎えた時代状況である。しかし小説内の「世界」においては、同様の葛藤は――必ずしも西洋人や在日朝鮮人、台湾出身者などを描かなくても――身近な「他者」の描き方に縮約されて現われる。昭和期に向かって、そのように小説の構造が「世界」の分裂と複数化を抱え入れる形へと変化していく過程を論じる。

第四章は、「〈感情移入〉の機制――他なる「世界」に生きる〈演技〉」と題して、第二、三章で論じた時代的な範囲（主に19世紀末頃から20世紀半ばまで）を、主題を変えて照らし、議論の更新をはかる。近代小説の語りの仕組みは、語り手と登場人物とのあいだに結ばれる感情の絆で成立している。両者の距離感の調整は、心的エネルギーともいえる「同情」（感情移入）が担っている。当然、その自然な働きは、心を擬装する「演技」の人工性とは表向き対立するが、両概念は配分を変えつつ、いわば共依存的に「近代文学」の様式の展開を支えてきたとも言える。その歴史を追うことで、小説の「世界」の構造的変化に別の物差しが当てられて、第二、三章の議論が補強されるだろう。本書中、最も時間と労力をかけた章のため、通しの読書時間が取れない方は本章を優先的に読んで頂ければ幸いである。

第五章は、「小説家としての正岡子規――先駆する〈写生〉」と題するが、いわば間奏的な短い章であり、第四章までの議論の補遺にあたる。文学の新時代をリードした子規が、俳人として名を成す前に書き残した小説が数点あるが、これらは実に興味深い近代文学史の転回の兆候を示している。その分析を通して、後に提唱される「写生」の語も、文字通り書き手が「生」を「写」す（＝表出する）文章であると同時に、読み手が自らの「生」を登場人物のそれに直に「移」す文章――すなわち「感情移入」を促す文章――という意味でも捉える必要があることを論じる。

第六章は、「現代文学と〈想像力〉の問題――村上春樹の場合」と題して、戦後におけるサルトルのブームから大江健三郎、そして村上春樹へと引き継がれた「想像力」を重要視する文学観が、近代主義的なものと比べてどのような変化を遂げたのか、また最終的に1980年代に至って「想像力」がその価値を急激に低下させたことが、逆にいかに新時代の文学の主題となっていったのか、主に大江健三郎と村上春樹とを意図的に対立させながら論じる。その作業を通して、19世紀末から20世紀末にかけて古い「世界」が消滅していく過程で現代文学が抱えた新たな課題と、その困難の具体性を明らかにしたいと考える。

終章は、「「世界」の消滅のあとさき――〈経験的―計算論的二重体〉の時代に」と題して、第一章から六章までの議論を要約しつつ、新たに文学以外のジャンルを含めた多角的視点の議論を付け加えて、およそ一世紀半に亘る「世界」文学の表象史を復習する。